2022 年 11 月 1 8 日

社会文教常任委員会　所管事務調査報告書

富士見町議会
議長　名取久仁春様

社会文教常任委員会
委員長　川合弘人

社会文教常任委員会は、2022 年 10 月 14、15 の両日、青森県の八戸市と青森市を訪問し、所管事務調査を行いました。富士見町は、井戸尻考古館の新館を建設する方針を示し、建設員会を立ち上げ、協議を続けています。議会としても前向きにとらえ、理解を深めることが重要です。今回の調査は、文化財行政の視点から、新館の在り方を考える材料を得るための視察研修を兼ねて行いました。

八戸市では埋蔵文化財センター是川縄文館と八戸市博物館を訪問。青森市では山内丸山遺跡と山内丸山遺跡センターを訪問しました。館長をはじめ担当職員から丁寧な説明を受け、館内、遺跡内、センター内を視察しました。

北海道・北東北の縄文遺跡群は、2021 年 7 月 27 日にユネスコの世界文化遺産に登録され、1 年が経過したところです。それぞれの遺跡や考古館では、年間を通じて様々な体験プログラムやイベントが実施されていて、訪問のタイミングとしてはベストだったと考えます。

往復の交通機関は JR 東日本を使いました。出発日が偶然、日本の鉄道開業 150 周年の記念日と重なり、記念事業の「JR 東日本パス」を購入したため、交通費は大幅に削減できました。さらに、全国旅行支援が直前にスタートし、国の支援制度を活用したため、宿泊費も削減できました。

記

・訪　問　日　　2022年10月14日（金）
・訪　問　先　　青森県八戸市の埋蔵文化財センター是川縄文館、八戸市博物館
・視察の内容　　考古館の新館建設にかかわる基本構想・理念・建設概要と、八戸市内に広がる縄文時代遺跡群の保存・活用などを調査
・参　加　者　　議員：川合弘人、五味平一、名取武一、織田昭雄
事務局：北原洋之次長
井戸尻考古館：小松隆史館長

1．視察の目的

2011年に開館し、全国的にも新しい施設である「埋蔵文化財センター是川縄文館」と、1983年に開館し、移転新築が計画されている「八戸市博物館」を視察し、基本構想・理念と、新館の設計コンセプト、建設概要などを調査する。

是川縄文館は当初、遺跡群の中に建てられたが、新館は遺跡内を外し、広い敷地を確保できる場所に移転して建設した。曽利遺跡の上に建設した井戸尻考古館と共通する点がある。また、国宝の合掌土偶を提示しているので、展示状況を併せて見てくる。

八戸博物館は開館から約40年が経過し、移転新築が課題となっている。この点も井戸尻考古館とつながるものがあり、参考にしたい。

2．視察報告

・埋蔵文化財センター是川縄文館

工藤朗館長と職員から会議室で説明を受け、そのあと、館内を案内していただいた。

① 概要

・敷地面積　1万3752平方メートル、延べ床面積4593平方メートル

・総事業費　24億2190万円（国庫2億9400万円、起債19億2760万円、一般財源1億9940万円）

・建設の方針　史跡整備・活用・管理の拠点、出土品の展示と体験学習の場。緊急発掘調査に対応する埋蔵文化財センターとする。

・建設地の選定　史跡の保護と、道路からのアクセスの良さを考慮した。遺跡の外に移転新築した。

・新館建設のコンセプト　東北地方の縄文文化を発信する施設。埋蔵文化財の調査、研究、整理を行い、収蔵する拠点施設。積極的に公開し、活用する。適切な保存管理を行う。

② 情報の発信

縄文の遺跡群に関するガイド研修を行い、日本語・英語による展示解説アプリケーションを作成し、公開している。

4道県（北海道、青森、秋田、岩手）では、包括的保存活用計画に基づき、「遺跡群周遊マップ」や、各市町の縄文イベントを網羅した「まるごとナビ」を作成し、来館者に配布している。

世界遺産登録を受けて、同館では旅行雑誌への特集記事掲載や、バスラッピング、オリジナルグッズ作製などの PR 事業を行っている。岩手、秋田両県と協力して、縄文スタンプラリーや、青森県内のデジタルスタンプラリー、青函スタンプラリーを行うほか、縄文カードの配布などを行っている。

③ 建設の経緯

泉山兄弟により、1920（大正9）年から本格的な発掘が行われ、出土品が八戸市に寄贈された。1963（昭和38）年、出土品を保存・公開するため、是川考古館が開館した。2008年、新館の建設工事に着手。翌年の2009年には、風張1遺跡から出土した「合掌土偶」が国宝指定された。縄文時代後期のもので、国宝は特別室に展示されている。

④ 是川縄文館の特徴

展示室、収蔵庫だけでなく、ボランティアが活動する専用室「ボランティアルーム」、体験学習を行う部屋が館内に併設されている。

入り口のわきに喫茶コーナー「これカフェ」も併設。名物は「縄文カレーセット」で700円。せんべい汁も付き、八戸の郷土の味が楽しめる。

観覧料は大人250円。市内の小中学生は無料。

⑤ 遺跡群、出土品を守った初期の発掘者への顕彰

入り口を入った目立つ場所に、泉山兄弟の胸像が置かれ、二人の功績を顕彰している。

・八戸市博物館

小保内裕之館長が館内を案内し、説明をしていただいた。

① 概要

1983（昭和58）年に開館。建設費は15億円。年間予算は6500万円。館の円滑な運営を図るため、博物館協議会を年2回開いている。

② 展示

1）常設展示：考古・歴史・民俗・無形の4分野で構成

2）企画・特別展示：春に「新収蔵資料展」、夏季、秋季に特別展を開いている。

③ 教育普及

1） 体験学習：博物館クラスを年 11 回延べ236人参加。おとなの博物館クラスを2回延べ18人参加。

2） 座学巡見：市民講座を年4回延べ184人参加。八戸城下巡り1回13人

3） 出張授業：昔の暮らし3件

4） 実習受け入れ：グッジョブ4件、延べ10人、博物館実習1期6人

5） 刊行物：年報、だより、図録など発行

④ 利用状況

累計93万1030人、最高4万2113人（S58）、最低1万5310人（H24）

平均2万3873人（R1 市内小中・支援校免除は延べ33校1259人）

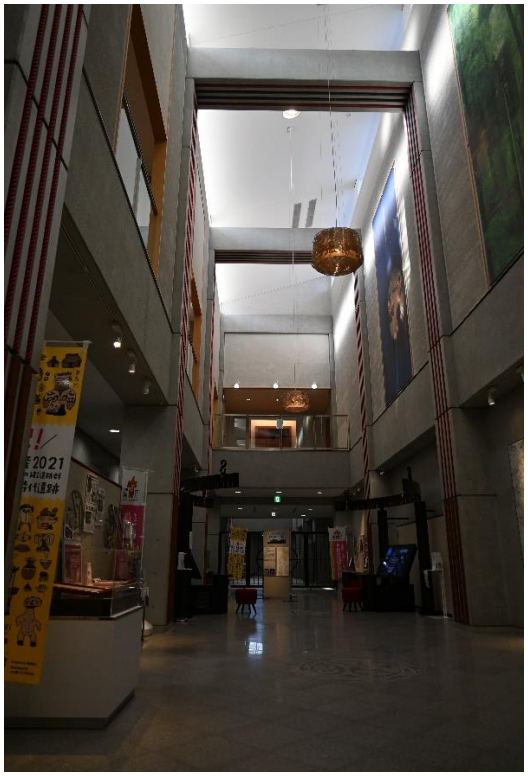
入館料：一般250円、高・大学生150円、小中生50円

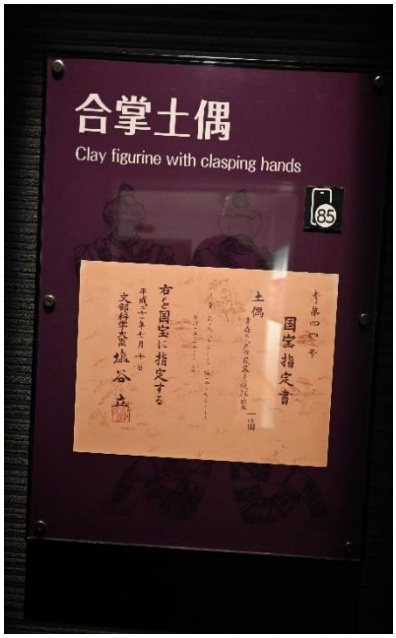
以上

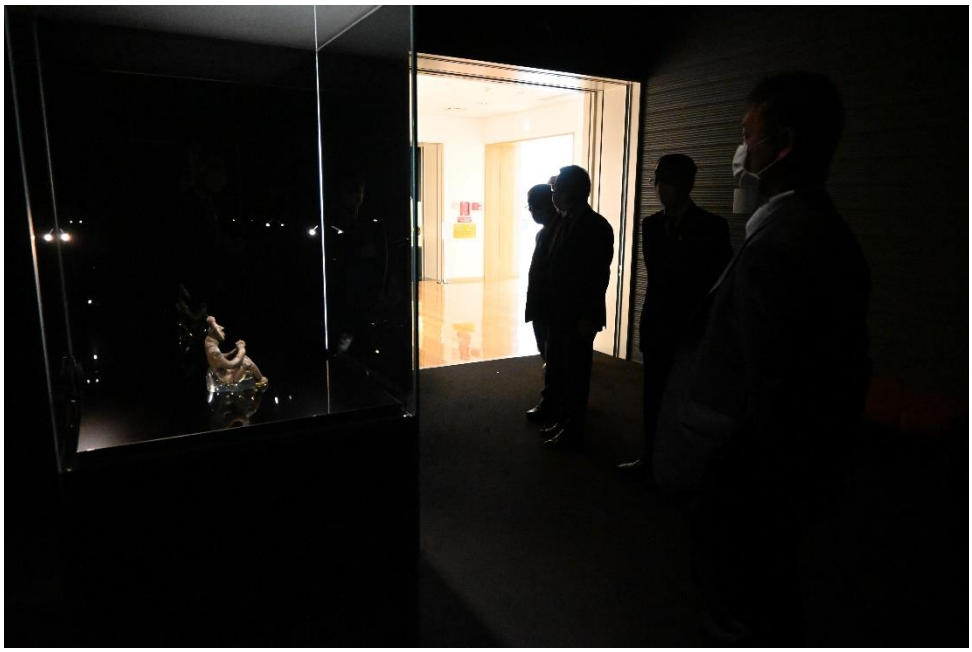
大正時代から本格的な発掘を行い、出土品を八戸市に寄贈した泉川兄弟を顕彰

八戸市の埋蔵文化財センター是川縄文館。多数の来館者が訪れている

是川縄文館の1階吹き抜け（職員は「冬は寒く、あまりお勧めしない」）㊧
特別室に展示されている合掌土偶の国宝指定書㊨







国宝「合掌土偶」の展示室。レプリカではなく、実物が展示されている

記

・訪　問　日　　2022年10月15日（土）
・訪　問　先　　青森県青森市の三内丸山遺跡、同遺跡センター
・視察の内容　　日本最大級の縄文集落である同遺跡をどのように公開しているか。出土品の保存、活用状況を調査。
・参　加　者　　議　員：川合弘人、五味平一、名取武一、織田昭雄
　　事務局：北原洋之次長

1．視察の目的

紀元前3900年～同2200年ころ、縄文時代中期に人々が集落を形成した三内丸山遺跡。縄文時代の人々の生活や当時の環境が分かる保存方法と活用方法、さらに活用に向けた取り組みを聞く。富士見町内の遺跡保全と活用に役立てる。

2．視察報告

三内丸山遺跡センター保存活用課の副課長、茅野嘉雄さん（諏訪市出身）に、遺跡内と同センターを案内していただいた。

当初は観覧料が無料だったが、現在は大人410円、高校・大学生200円。有料化により、入館者の実数を把握し、現在は年間約20万人が訪れている。

特別史跡三内丸山遺跡は陸奥湾を望む段丘上に立地する大規模な拠点集落。膨大な量の土器や石器、日本最多の2000点を超える土偶が出土した。祭祀遺物、多種多様な動物の骨、魚の骨、クリやクルミなどの堅果類も出土。定住し、季節に応じて巧みに自然資源を利用したことを伝えている。

1）保存に向けた取り組み

4道県と関係14市町による共同体制を設置し、包括的保存管理計画に基づき、保存を行っている。構成資産が所在する市町では、景観法に基づく景観計画を策定し、周辺の景観・眺望をコントロールしている。

2）活用に向けた取り組み

（ア）遺跡ガイド：地域住民が務めるボランティアガイドが遺跡を案内し解説するサービスを行っている。スマートフォンによる音声ガイド、タブレット端末を通じて発掘調査や、当時の生活を見ることができるガイドシステムによる情報提供も充実している。

（イ）体験プログラム：土器や土偶、アクセサリーなど、縄文時代の人々の知恵や技術に触れる体験プログラムを用意。縄文まつりやフォーラムの開催を通じて普及・啓発に取り組んでいる。体験は、センター内の団体も利用できる広い会場で行い、土偶づくり、土器づくり、勾玉づくり、組みひもづ

くりなどのプログラムを用意し、ボランティアが指導している。

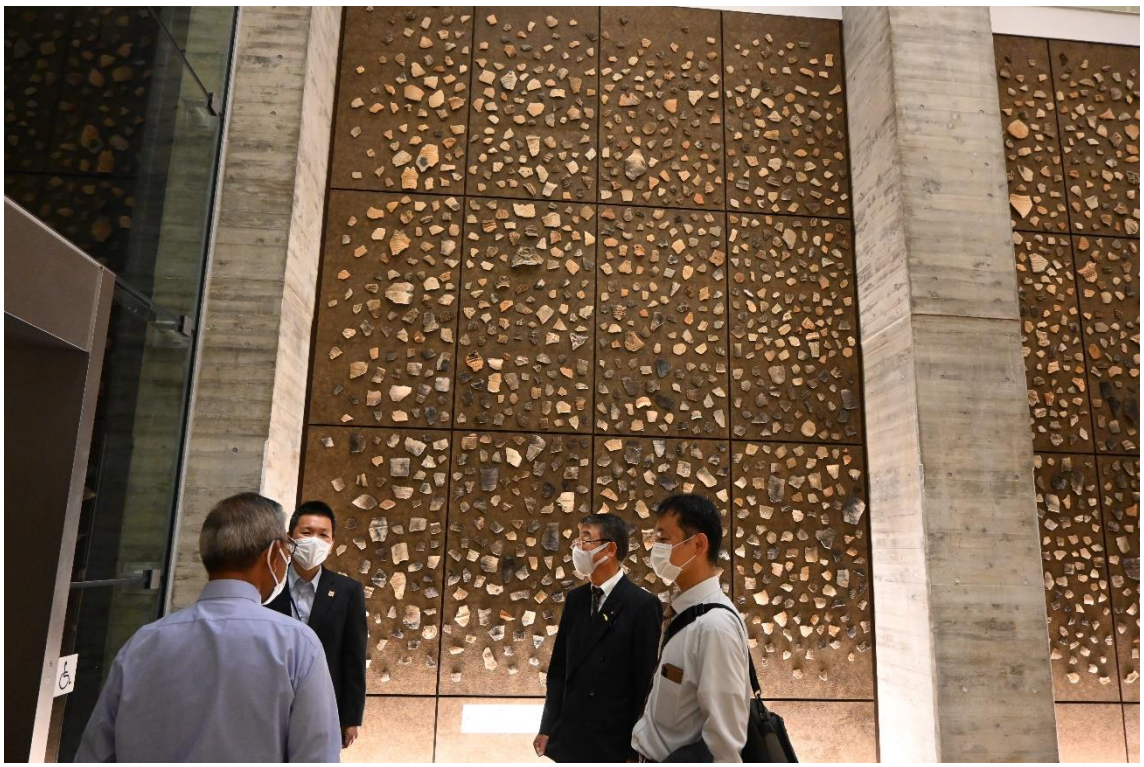
(ウ) 発掘調査現場：毎年夏から秋にかけて、発掘調査の現場を公開。担当職員による解説も行っている。

(エ) 縄文グルメ：「れすとらん五千年の星」では、発掘プレート（1200円）、そふと栗夢（320円）、縄文パフェ（780円）などを提供している。

茅野嘉雄さん㊨の案内で遺跡内を見学。遺跡のシンボル、大型掘っ立て柱のやぐら。6本柱が長方形に配置し、高床式の建物があったと考えられている

発掘に基づき、屋根に土を乗せた復元住居（中央）

地中から見つかった柱の跡。地下水が豊富なため、腐らないで残った



遺跡センターの壁には、出土した土器片を貼り付け、再利用している

遺跡センターの収蔵庫はガラス張り。多くの出土品を見ることができる

体験教室の部屋は広く、ボランティアの指導で子どもたちが勾玉を作っていた

6本の掘っ立て柱の跡が出土した場所は建屋で保護され、見学することができる。
穴の直径は約2メートル、深さ約2メートル、間隔は4．2メートル

ボランティアガイド㊧が見学者を案内し、解説も行っている

まとめ

埋蔵文化財の調査、収蔵から活用へ

世界文化遺産に登録された青森県内の遺跡、考古館・博物館を見学し、共通して指摘されたことは「文化財の活用」だった。埋蔵文化財は地域の資源、財産である。調査、収蔵、活用を行うほか、遺跡を整備して活用することが、拠点施設の役割として求められる。地元住民や来館者が地域の魅力を再発見し、誇りや愛着が感じられるような取り組みが重要であることを学んだ。

考古館の新しい形として、常設展示室、企画展示室のほか、ボランティアルーム、体験学習室を通じて、地域住民や来館者と触れ合う場となることの必要性を実感した。

考古館の建設地に関しては、遺跡を破壊することなく、遺跡エリアの外に建設すること、広い敷地を確保し、アクセスのよい場所を選ぶことが重要だと考える。収蔵庫は、将来的な増加を見越して、十分なスペース確保することが求められる。

富士見町は町内全域に縄文時代の遺跡が点在する。八戸市も市内に多数の遺跡があり、未調査の遺跡も多数あるという。八戸市の取り組みは大いに参考になると思う。文化遺産、環境の保全と活用は、富士見町にとって重要な課題であり、豊かな自然環境を守りながら、縄文の遺跡を調査、研究していくことが町の発展にもつながると思う。

年間を通じて、さまざまな体験プログラムやイベントを実施し、県の内外から訪れた人たちが楽しく八ヶ岳山麓の縄文に触れられる場、機会を用意してほしい。

縄文の遺跡群は富士見町の財産であり、遺跡や出土品、自然環境を通じて、時を超えた旅を一緒に体感できれば素晴らしい。